乙訓の竹の子

辻　憲男（文学部教授）

長岡京は十年間の都であった。京都西山の丘陵は桓武天皇の母・高野新笠の出身地で、東南に水陸の要衝が開けている。寵臣・藤原種継（ふじわらのたねつぐ）が建設を指揮した。ところが遷都の翌785年、この立役者が襲撃され、皇太弟・早良親王らが捕えられた。その後も宮中に不幸が相次ぎ、桓武は怨霊に恐れおののいた。

万葉歌人・大伴家持も事件に連座した。思えば26年前、自ら、

新たしき年の始めの初春の今日降る雪のいや重（し）け吉事（よごと）

という言祝ぎ（ことほぎ）を歌って、万葉集を閉じた。そのような万代への祈りは空しくなった。もっともそれより前、一門凋落の予感は、

春の野にかすみたなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも

うらうらに照れる春日（はるひ）にひばり上がり心悲しも独りし思へば

など、春愁の絶唱にきざしていたと見る人もある。

乙訓（おとくに）は竹の里、竹取物語のふるさとという。「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」。かぐや姫は五人の求婚者に難題を出した。石作の皇子、倉持の皇子、阿部御主人（みうし）、大伴御行（みゆき）、石上麿足（まろたり）。みな古めかしい名前だ。御行は、竜の首にある五色の玉を求めて、難波から船出した。しかし竜神の怒りに触れ、三～四日嵐に翻弄され、明石の浜に流れ着いた。大まじめで涙ぐましく、滑稽だ。大伴御行は７世紀に実在した功臣の名。大伴氏の長を軽く扱った。

天人・かぐや姫は地上界に来て、人間のやさしい情愛を知った。原作は単なる竹林の幻想ではなく、ふしぎな少女の心の目覚めの物語でもある。

長岡京大極殿跡。京都府向日市、長岡京市は旧乙訓郡。